

一宮市 博物館 だより

No.69 2026.3

もくじ

特集 一宮らしさ～誇りに思う民俗文化に～ … 2
 研究余談「朝鮮信使」から「朝鮮通信使」へ … 5
 資料紹介「大」の字が刻まれた常滑壺 …… 6
 一宮市内の鍛冶や鑄造関連資料について …… 8
 郷土史から見る「木曾川堤（サクラ）」 ……10
 尾張の唄
 —伊藤正之助『尾張童謡集』について— ……11
 博物館アルバム ……12
 2026年度催し物のご案内 ……16



豊臣秀吉像（伝狩野山楽筆・南化玄興賛）妙興寺蔵（博物館寄託）

京都妙心寺第五十八世の南化玄興の慶長5年（1600）の賛があり、豊臣秀吉が没した慶長3年（1598）からそれほど時期が経過していない頃に制作されたと思われます。豊臣秀吉と甥の秀次は戦国時代に荒れていた妙興寺を再興しました。

一宮らしさ

～誇りに思う民俗文化に～

一宮市博物館
館長・学芸員
久保 禎子 -Kubo Teiko-

一宮はなんのまち？

博物館に来館する小学生に「一宮はなんのまち？」と尋ねると、15年前までは必ず、「織物のまち！」という自信満々の答えが返ってきたものでした。しかし、久しぶりにこの問いを小学校3年生に投げかけたところ、「ん？」「尾州！」と答えが返ってきたのです。

時代は移り変わりますが、歴史や足跡が変わることはありません。評価や解釈は変化しますが、事実が変わることもありません。伝えることの大切さを思った瞬間でした。

平成17年の合併を経て113.82平方キロメートルになった一宮市は、市のウェブページによると、「日本のほぼ中央に位置する愛知県の北西部にあり、名古屋市と岐阜市の中間にあつて、木曽の清流と温和な気候、風土に恵まれた平坦地となっています。」とあります。一宮市域に山はなく自然堤防と後背湿地、扇状地に位置します。木曽川の向こうに山々が見えますが岐阜県や滋賀県の山で、高みは自然堤防か人が積み上げた盛土です。大正10年(1921)の市制施行時の合併、昭和15年(1940)と30年(1955)の合併、平成17年(2005)の合併を経て、令和3年(2021)には中核市となり、政令指定都市に次ぐ都市になりました。

では、「一宮はなんのまち？」「一宮はどんなまち？」をAIに聞いてみたところ、「主に繊維(毛織物)のまちとして知られる、古くから

の織物産地(尾州)です」と出てきます。古くからとはいづかな?と思い、もやもやしてしまふのです。『新編一宮市史』の本文編に機織りの写真が掲載されています(写真1)。この織機は、尾張名所図会「結城綿織屋の図」に描かれた高機と同様の形をしています。『百姓土と共に七十年』の著者野村精氏が丹陽町九日市場で撮影した貴重な写真です。

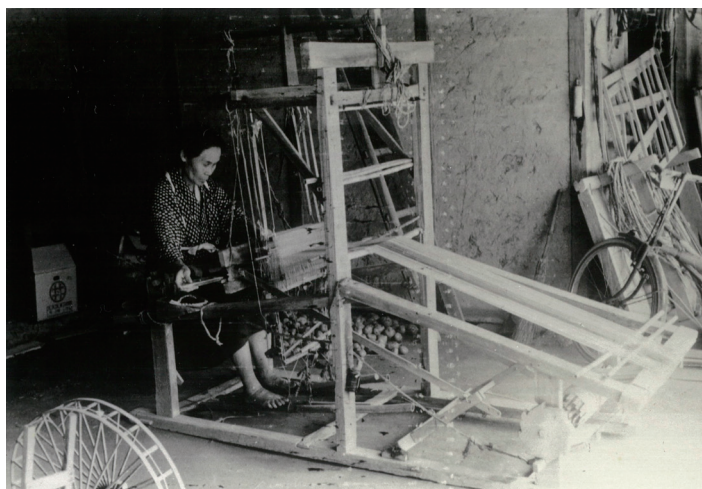


写真1 機織りの様子
(『新編一宮市史本文編下』より、野村精さん撮影)

手前に糸車が写っており、家で糸つむぎと機織りがされていたことがわかります。機にかかっている糸の素材は写真からはわかりませんが、綿糸ではないかと思えます。一宮市域で江

戸時代中期から棉栽培を背景に発達した綿織物は、棉の輸入に圧倒され明治時代前期には衰退しました。それに代わって養蚕が盛んになり、絹綿交織物という織物が盛んに工場では織られました。家々でも養蚕が行われ、博物館にはケバトリやモズオリなど養蚕の道具がたくさん収蔵されています。ただ、聞き取りでは「カイコがはう音が嫌だった。」と言う方もいて、辛い仕事だったのだらうと思つたものです。大正時代になると社会情勢の影響もあり、毛織物の生産が急激に増加します。「毛織物のまち」はここから始まります。ただ、以後も家々では棉を栽培し、自分の家の着物をまかなつてゐる人もいました。「織物のまち」の始まりは毛織物ではなく綿織物であつたことは、これからも伝えていきたいことの一つです。

一宮の風景

一宮と言っても、街道筋などの町と農村では全く景観が異なつてゐました。今では市域全体の田畑が減少し、道の様子も変わり、まちの成り立ちや姿もわからなくなつてゐるところがあります。馬見塚の前田利昇さんから聞き取りをし、柳田智子さんに描いてもらつた絵があります(図1)。ちょうど秋祭りの頃、ノンポリがゆらゆら揺られて、黄金色の稲が頭をもたげ、子どもたちはヨツデを持って川に出かけていく、そんな風景を描きました。瓦屋根の色がところどころ違つたり、猫が屋根の上で背伸びをした

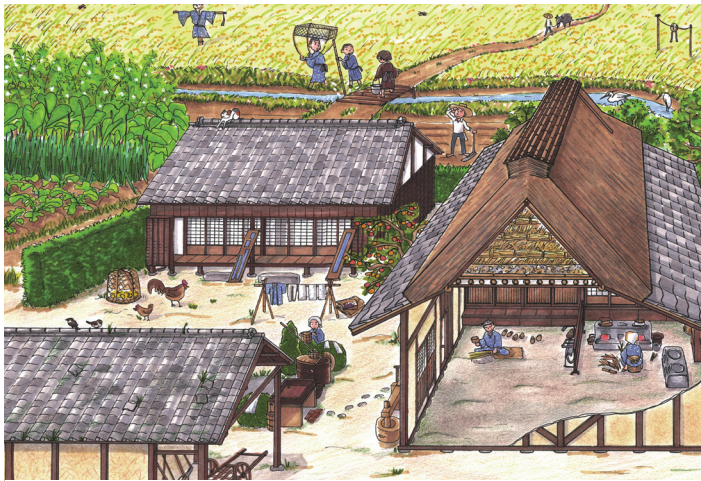


図1 100年前の農家の暮らし(修正前の絵)
話者 前田利昇さん 絵 柳田智子さん

り、苦勞して描いてもらいました。ところが、「洗濯は見えるところに干さない」「クドから煙が出ていない」などのご指摘をいただき、さらに修正をしました。この絵には、畑の棉の実がはじけて干しているところなど、さまざまな情報を描き込んでいます。今では、ムギワラ屋根の家は市域で数軒しか残っていません。いつかこの景色も記憶でしかなくなり、記録でしかなくなるのだと思います。



写真2 六本クネタをつくる 浅井町尾関 松岡末房さん

本来の一宮らしき
産業という切り口では一宮は「織物のまち」ですが、人の暮らしから見ると、やはり田畑の多い農村だつたと言えます。1年の行事は田植えや稲刈り、畑の種まきなどが中心になってゐました。冬には田んぼにクネタをつくり、土を高く積んだところにジャガイモやオクナ(ナバナ)などを植えて二毛作をしました。最も高いのは六本クネタで、積み上げたクネタの美しさを若者は競つたものでした(写真2)。

田畑が広がる一宮らしさが次第に失われると、それに伴つていた暮らしも変化していきま

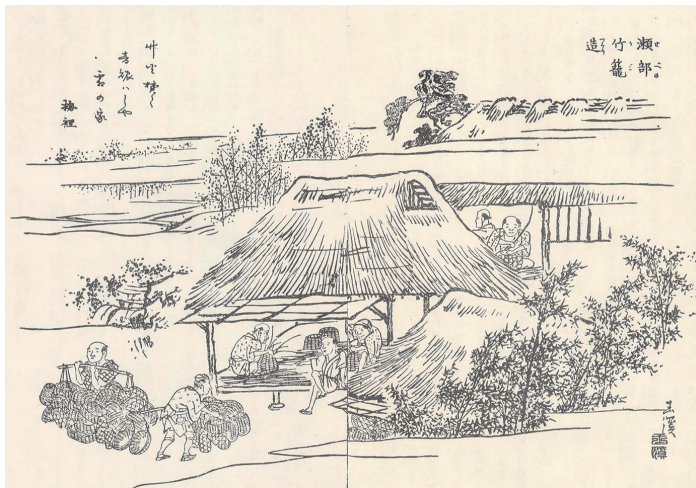


写真5 「瀬部竹籠造」尾張名所図会后編巻六



写真3 ヒゴコキを使う(尾関克巳さん)



写真4 ソウレンで使う花籠をつくる(尾関克巳さん)

一宮市内にはもう一つ、産物として有名だった瀬部の竹細工があります(写真3・4・5)。昭和の中頃までは、一家全員で竹細工をするほどでした。しかし、今は一軒も残っていません。



3. ご飯の上に魚を並べる



4. 箱を重ねて押す



5. できあがり



1. モツゴやタモロコを七輪で焼く



2. 甘辛く煮る

写真6 押しずしをつくる(小島勇さん、小島よし子さん、小島孝代さん)



写真7 ふな味噌をつくる(豊田富子さん)

食の特徴として、淡水魚を食べる習慣が挙げられます。木曾川に近い地域では、漁師がサツキマスやアユを獲り、その他の地域の日常的な魚といえばフナやウナギ、ナマズなど、田んぼや用水で獲れる魚でした。貝と言えば、ツボ(タニシ)がよく食べられました。食生活の変化や違いは地域性やその地域の生業の特徴をよく表しており、比較をするとわかりやすいと言えます。その良い例が箱ずしです。愛知県の海浜部では海で獲れたエソのチカラ煮やアサリなどを箱ずしの具にするところもありますが、一宮ではタモロコやモツゴ、ハエ(小さいフナ)を焼

いて干し、甘辛く醤油で煮て(たいて)すし飯にのせ、その上にハランをのせて押します。ハランは屋敷まわりに植えてあったものです。押しずしは、祭りのときの楽しみの一つでした。ふな味噌も冬に作る料理でしたが、今では家庭でつくられることはなくなりました。衣食住や生業も、本来の一宮らしさや地域性が失われつつあります。博物館建設の土台となった『新編一宮市史』には、民俗編がありません。これからは、一宮市を誇りに思うことができる「らしさ」を、残された民具や写真などの資料から伝えていきたいと考えています。

「朝鮮信使」から「朝鮮通信使」へ

美濃路沿いにおける用例の変化

何気ない疑問も掘り下げていくと、思いがけない大きな歴史につながることは珍しくない。

数年前に、「起渡船場跡の石碑に朝鮮信使とある、朝鮮通信使ではないのか？」という問い合わせがあった。起渡船場は美濃路の起川（木曾川）の渡船場であり、江戸時代初頭に設けられ、昭和三十年（一九五五）濃尾大橋の架橋でその役割を終えた。昭和四十二年（一九六七）に愛知県指定文化財となり、渡船場の石灯籠の傍に碑文が建立された。碑文には、江戸時代の美濃路にあった通行が刻まれ、確かに「朝鮮信使」とある。

今日、一般的に用いられている「朝鮮通信使」は学術用語であり、その定着は一九七〇年代とされる。「通信使」という用例も史料上には登場するが、日本・朝鮮双方の史料とも「信使」が多く、一九六〇年代までは「朝鮮信使」という名称も多く利用されてきた（池内二〇一七）。実際に、当時の美濃路沿いの郷土史等には「朝鮮通信使」の用例は確認できない。戦時中に編纂された『起町史』やその編纂に携わった林英夫の一連の論考にも「朝鮮信使」とある。さらに、『尾西郷土史』（一九五九）、『二宮市萩原町史』

（一九六九）、『稲沢市史』（一九六九）、『新修大垣市史』（一九六八）にも「朝鮮信使」とあり、『墨俣町史』（一九五五）と『安八町史』（一九七五）は「朝鮮使節」が利用されている。つまり、この時点までは、美濃路沿いでも「朝鮮通信使」ではなく「朝鮮信使」、「朝鮮使節」が用いられている。そのため、昭和四十二年に制作された石碑に「朝鮮信使」とあるのは一般的なことである。

昭和六十一年（一九八六）尾西市歴史民俗資料館開館時に発行された常設展示解説書の中には、「朝鮮通信使」が利用されている。八〇年代以降に編纂が始まる『尾西市史』や『新修稲沢市史』は朝鮮通信使の名称が利用され、以後定着したようである。美濃路沿いにおいても、一九六〇年代は「朝鮮信使」、八〇年代には「朝鮮通信使」に移行したことがわかる。渡船場跡の石碑や郷土史に見られる「朝鮮信使」という表記も、その時代を映すものとして読み直すことができる。

七〇年代の郷土史は未確認であるが、全国的な動向と同じく、美濃路沿いでも、七〇年代〜八〇年代にかけて「朝鮮通信使」が利用される

ようになったと考えられよう。一九七〇〜八〇年代は映像作家辛基秀によって、日本国内で朝鮮通信使の普及活動が活発に行われていた時期であり、国内で朝鮮通信使が知られるようになった（山口二〇二四）。

現在、朝鮮通信使をめぐる催事が日韓友好の象徴として、さまざまな催しに取り上げられる。「朝鮮通信使」の定着にはそのような背景も関わっている。何気ない疑問を突き詰めると、日朝関係史はもとより、近現代の日韓関係史にもつながるのである。

（宮川充史）

参考文献

- 池内敏「朝鮮「信使」と朝鮮「通信使」」（『絶海の碩学』名古屋大学出版会二〇一七）
- 山口祐香『発見』された朝鮮通信使（法律文化社二〇二四）

「大」の字が刻まれた常滑壺

はじめに

今回紹介する資料は、法園寺中世墓遺跡（大和町馬引）から出土したものである。この遺跡は、「中世墓」の名のとおり、鎌倉時代～室町時代の墓の様相を表す遺跡で、方形区画を持つ積石墓や、火葬骨を納めた蔵骨器、石製五輪塔などが検出されている。

本稿では、この蔵骨器の中の一つである、「大」の字が刻まれた常滑壺について紹介したい。

常滑窯製品の刻文

この「大」のように、ヘラや棒状の工具を用いて器の表面に刻まれた絵画や文字、記号は「刻文」と呼ばれる。常滑窯において、刻文のあるものは、全体の生産量のごく一部であり、中世の製品に見られ、近世になるとほとんど見られなくなる。壺や甕といった一般的な器種に、「×」や「○」などの単純な記号が施されているものが多いが、その理由について、現状では明確にわからない〔愛知県2012〕。

法園寺中世墓遺跡で出土している常滑製品で、刻文が施されたものは当資料を含めて5点ある。「大」の字のように文字が刻まれている

のはこの資料だけで、他の資料は「+」のような単純な記号が施されているのが大半である。

「大」の字が刻まれた常滑壺

当資料（写真1）は、常滑窯編年〔愛知県2012〕で6b型式にあたり、13世紀後半に作られた。口縁部は半分打ち欠かれているものの、玉縁状を呈しているのが確認でき、胴部には二筋の沈線がめぐる。「大」の字は、肩部に三か所刻まれている。

改めて「大」の刻文を観察したところ、以下のとおり、気になる点があったので指摘しておく。

- (1) 施文位置：肩部に三か所施文されているのは先述したが、ほぼ均等な距離感で刻文が施されている（図1赤丸）。
- (2) 3種類の刻文：拓本（図1A～C）のとおり、すべて字体が異なる。
- (3) 消された痕跡：AとBのみ左から右にかけてヘラのような痕跡で「大」の字の一部が消されている。Aは消した後には左はらいを上から書き直しているが、Bは消されたままである。

- (4) 書き順（図2）と書き方：A～C全てが「大」の書き順と異なる。ただしAはヘラで消した後には左はらいを書いた痕跡があるため、本来は通常の書き順であった可能性がある。Bは確実に異なり、左はらいが1画目、その後、右はらい、最後が横となる。Cは左と右のどちらが先かがわかりかねるものの、最後に横であるのは間違いない。また、本来はらいである部分が、A Cは左右ともに、Bは左のみ、とめになっている。

これらの点に関して考察するには、消費地である一宮市には資料が不足している。前述したとおり、出土した法園寺中世墓遺跡には常滑窯製品は見つかっていないものの、同じ刻文があるものはない。市内の他遺跡から出土した資料も同様である。生産地である常滑地域をはじめとする他の地域での出土は確認されているが、刻文の一例として紹介されているものが多く、施文位置ないし施文箇所、書き順といった詳細まで読み取れなかった。

そのため、本稿ではあくまで資料の紹介にとどめ、「大」の刻文をもつ資料の詳細な比較・

検討を今度の課題としたい。

(瀧はる香)

※『法圓寺中世墓遺跡発掘調査報告書（一宮市埋蔵文化財調査報告Ⅰ）』（一宮市教育委員会 1995）で、遺物番号25として掲載されている資料である。



写真1 「大」の字ある常滑壺

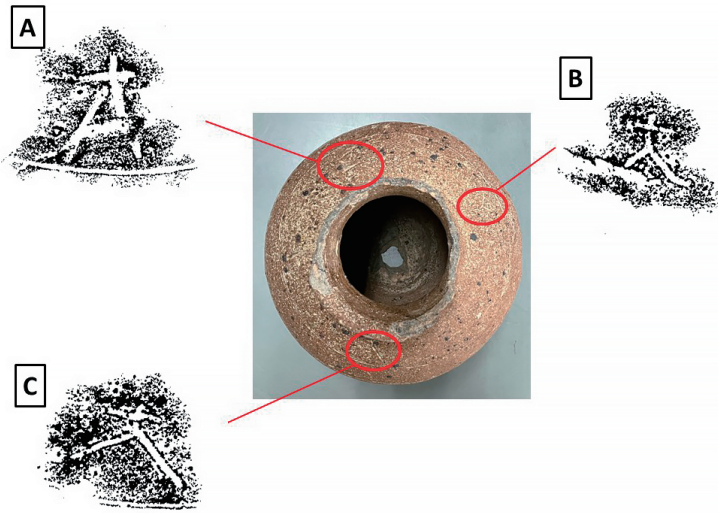


図1 施文位置および施文拓本

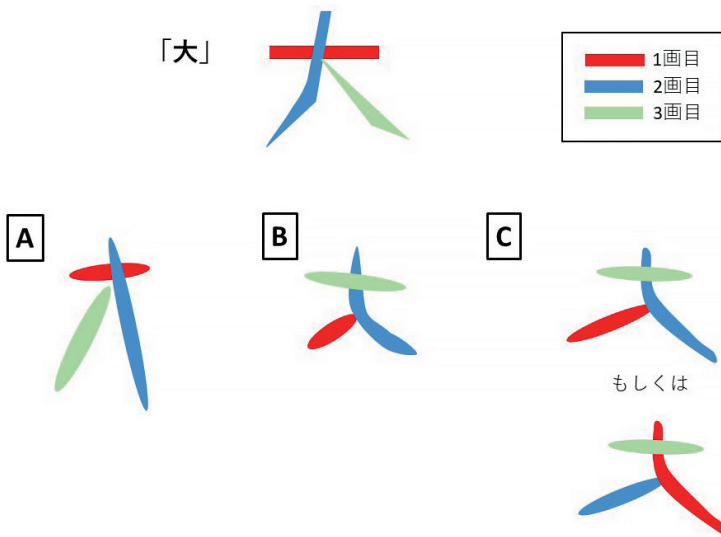


図2 「大」の字書き順

参考文献

- ・愛知県2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世常滑系』
- ・一宮市教育委員会1995『法圓寺中世墓遺跡発掘調査報告書（一宮市埋蔵文化財調査報告Ⅰ）』
- ・中野晴久1995「知多半島古窯址群の篋描記号文について」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅶ』常滑市教育委員会 p.21-60

- ・安井俊則2010「渥美窯製品にみられる刻文について―ヘラ描き記号文を中心として―」『愛知県史研究』第15号 愛知県 p.209-234
- ・吉岡康暢2010「中世窯の成立・展開と加飾法―渥美・常滑窯の押印文・刻文を中心に―」『渥美半島の考古学』（小野田勝一先生追悼論文集）田原市教育委員会 p.255-288

一宮市内の鍛冶や鑄造について

はじめに

遺跡の調査では、製鉄や鍛冶に関する遺構、遺物が出土することがある。今回は、それらの資料について概観する。

製鉄や鍛冶に関する資料について

発掘調査においては、製鉄や鍛冶の鉄加工段階で生じる「鉄滓」、送風器である鞴から炉の中に風を送る管の先につける「羽口」などがみつかることがある。また、鉄滓や羽口とともに砥石や、炉壁なども出土することがあり、これらは製鉄や鍛冶の関連資料として挙げられる。関連遺物等の出土により、遺跡が製鉄や鍛冶に関与している可能性や、工房や工人の存在を推定できる。

製鉄は鉄材を作り、鍛冶は材料をもとに鉄器を作る行為である。したがって、それぞれ、関連する資料には多少の違いがある。例えば、鉄滓を細かく分類すると、「製鍊滓」「鍛冶滓」「鑄物滓」に分けられる(窪田…一九八三)。出土した鉄滓がどの種類に該当するかで、その遺跡

で何が行われていたのかを推察することができ。また、製鉄関連の遺跡では、砂鉄や鉄鉱石など鉄材の原料が見つかることもある。

一宮市の鍛冶に関するもの

一宮市内においては10遺跡から、鉄滓や炉跡などが見つかっている。今のところ、市内では鍛冶に関する資料のみである。表1に出土した遺跡をまとめた。このほか、浅井町西浅井や浅井町江森などでも鉄滓等が出土していたようである。特に、浅井町江森は「金糞」の地名のついた場所からの出土であり、地名との関係は興味深い。市内の珍しい出土例では、一宮市浅井町の清郷遺跡が挙げられよう。この遺跡では、10世紀後半の鍛冶遺構と竪穴遺構が検出されている。これについては、蔭山誠一氏(二〇一六)によって、鍛冶炉の復元や鍛冶工程についての検討が行われている。

市内の関連遺跡をみていくと、10遺跡中、8遺跡から中世の資料が見つかっている。愛知県は、中世は鉄の消費地として考えられている(蔭山…二〇一六)とのことで、その様子が伺える出土傾向といえるのではないだろうか。ちなみに、古代では、製鉄関連の遺跡は春日井市や小牧市で製鉄炉が見つかっている。県内では、製鉄遺跡よりも鍛冶関連出土資料や遺構の出土のほうが多いように見受けられる。前述のとおり、市内の出土も鍛冶関連のみである。製鉄によって作られた鉄を用いるほか、鉄製品をリサ

イクルして作り直すといったことも行われていたのだろうか。また、鍛冶を行う際には、鍛冶具が必要である。鉄鉗と呼ばれる鉄をつかむ道具や、鉄を打つ道具などは市内には出土例がない。鉄鉗は、古墳の副葬品として出土することがあるが、市内の古墳からもそうした出土はない。市内に限らず、鉄滓や羽口は出土するが鍛冶具が出ていない例は一定数みられる。これについては、全体的な出土傾向などをもとに、今後明らかにしてみたい点である。

鑄造関連資料について

今回、関連遺跡をまとめる中で、鑄造関連の出土品があることもわかった。最後に、簡単にそのことにもふれる。

資料は、伝法寺本郷遺跡と八王子遺跡、荏安賀遺跡から見つかっている。鑄型の破片や炉壁、銅滴のついた遺物などが出土している。出土品は、銅製品製作に関係しているものが多い。

伝法寺本郷遺跡は、中世以降の鑄造資料が確認されていないため、鑄造を行っていた可能性としては古代に求められる。荏安賀遺跡も、おそらく古代の資料であると考えられる。八王子遺跡では、古代と中世での出土が確認できる。市内では、古代から鍛冶のほか、鑄造も行っていた可能性があるかと推測できる。

おわりに

以上、鍛冶や鑄造について、市内の遺跡を概

観した。今回は、古代から中世にかけて、製鉄ではなく鍛冶を中心に、また、一部の地域では鑄造も行っていた可能性を考えることができた。市内の出土資料の傾向や、全体的な様相は今後の課題として取り組んでいきたい。

(中尾真琴)

参考文献

- ・一宮市(一九七四)『新編一宮市史 資料編四』
- ・蔭山誠一・鈴木正貴(一九九九)「門間沼遺跡における古代・中世の鉄器生産を考える」『門間沼遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第八〇集』
- ・蔭山誠一(二〇一六)「愛知県一宮市清郷遺跡の鍛冶遺構」『愛知県埋蔵文化センター研究紀要第一七号』
- ・窪田蔵郎(一九八三)『考古学ライブラリー一五 製鉄遺跡』ニューサイエンス社
- ・樋上昇編(二〇〇一)『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第九二集
- ・宮腰健司他編(二〇〇六)『島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第一三九集

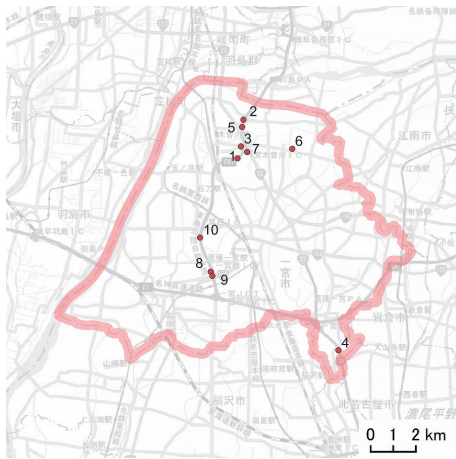


図1 鍛冶関連資料出土遺跡分布図 (1/250000)



写真1 「金属工房の工具」(提供 奈良文化財研究所)

	遺跡名	鍛冶関連遺物または遺構の時期
1	門間沼遺跡 (木曾川町門間)	・古代 (6世紀前半、7～10世紀) ・中世 (13世紀)
2	北道手遺跡 (光明寺)	古代 (古墳前期)
3	大毛池田遺跡 (木曾川町黒田)	・古代 (6世紀末～7世紀、8世紀後葉～9世紀) ・中世 (12世紀～15世紀後半)
4	伝法寺本郷遺跡 (丹陽町伝法寺) ※鑄造資料あり	・古代 (8世紀後半) ・中世 ・中世以降
5	田所遺跡 (木曾川町黒田)	・古代 (9世紀以降の平安時代) ・中世 (12世紀後半～13世紀後半)
6	清郷遺跡 (浅井町大日比野)	古代 (11世紀)
7	大毛沖遺跡 (大毛)	中世 (12世紀後半～14世紀)
8	八王子遺跡 (大和町苅安賀) ※鑄造資料あり	中世 (13～17世紀)
9	苅安賀遺跡 (大和町苅安賀)	中世・近世 (16～19世紀)
10	馬引横手遺跡 (大和町馬引)	中世

表1 鍛冶関連資料出土遺跡

郷土史から見る

「木曾川堤（サクラ）」

〜観光地の形成〜

木曾川の堤防上には、春になると多くのサクラが咲き誇る名所「木曾川堤（サクラ）」が存在する。昭和二年（一九二七）、国の名勝及び天然記念物に指定され、その範囲は一宮市北方町から江南市草井町まで約9kmにわたる。

昭和九年（一九三四）に発行された『産業と観光の一宮市とその附近』において、観光地の一つとして紹介されると共に、掲載された吉田初三郎の鳥瞰図にも桜並木が立ち並ぶ様子が描かれる。

ここでは、それ以前に発行された郷土史から「木曾川堤（サクラ）」の観光地化の流れを追う。

「木曾川堤（サクラ）」の特徴と歴史

文化財指定前の大正十五年（一九二六）、内務省により調査された『天然記念物及名勝調査報告』では、「今日諸地方に集植せられたる多数の櫻と異にして、主として彼岸櫻と枝垂櫻より成り、一も染井吉野なき（※1）を特色とす。（中略）木曾川堤に於ける如く長大なる堤防道路の両側二千余株の並木を作れる所は他に之あるを見ず。」とある。開花時の景観と当時植樹された樹種の貴重さが特徴であり指定理由となっている。

この地にサクラが植樹されたのは明治十八年（一八八五）のことである。前年に起きた洪水により損傷した堤防を補修する際、もともと植えられていた松が伐採された。それを受け、当時の愛知県知事勝間田稔の創意により地元有志がサクラの苗を寄付し、植栽したのが始まりである。その後も濃尾地震の被害を受けての補植や、明治四十年（一九〇七）に葉栗郡で組織された蘇堤桜保勝会（※2）による大正二年（一九一三）の大補植など、幾度かの補植が行われ、徐々にサクラ並木としての景観が整えられていった。

郷土史から見る「木曾川堤（サクラ）」

地元で発行された郷土史を見ていくと、指定以前から地元の人々がサクラに目を向けていたことが分かるとともに、観光地化の流れを読み取ることができる。ここでは、葉栗の郷土史を中心に見ていく。

最初の植樹からわずか16年後である明治三十四年（一九〇一）発行の『愛知縣葉栗郡地理歴史』において「光明寺堤の上に櫻樹数百株を植付たり明治十七八年の頃勝間田本県令の創意に係ると云ふ今は大に発育して花時の風景最佳なり」との記述がある。次いで、大正六年（一九一七）発行の『葉栗村志稿』では、「今や櫻樹漸く老境に入り花時の壯觀真に愛すべく近年掛茶屋の増設と共に来り遊ぶ者甚だ多し」とある。さらに大正十年（一九二二）発行の『葉栗郡紀要』においても「光明寺の櫻」として「近年遠近より来り

遊ぶ者踵を接す」と記される。これらの記述により、木曾川堤のサクラは明治後期には、関心を寄せられており、大正になり、サクラが育つと共に遠方からの見物客が訪れ、茶店も立ち並ぶなど観光地としての側面が強くなっていったことがわかる。実際に昭和期の絵はがきでは茶店が並び、にぎやかな様子が確認できる。

まとめにかえて

郷土史を通して、「木曾川堤（サクラ）」が次第に観光地化していった流れを見てきたが、当初から観光目的の植樹であったかは定かではない。植樹の目的について、「訪れる見物人によって堤防が踏み固められることなどを期待した」との話もある。今後は他地域の植樹の事例とも比較しながら検討していきたい。

（吉田茉由）

※1 指定当時は主にエドヒガン、シダレザクラ、ヤマザクラの3種類であったが、現在はソメイヨシノも見られる。

※2 大正二年設立とする郷土史も見られる。

なお、引用に際しては、読みやすくするため、適宜、旧字体を新字体に改めた。



サクラの絵はがき

尾張の唄

—伊藤正之助『尾張童謡集』について—

今回、『新編一宮市史』の事業に携わっていた伊藤正之助（一八九五～一九六八）に關係する資料（個人蔵）を整理する機会を得た。これらの資料の中には『岩倉町史』關係、『西春村史』關係、『尾張童謡集』などが含まれている。伊藤が『新編一宮市史』編さん事業に携わっていたことについては、市史編さん委員であった塚本学が、『新編一宮市史資料編十』（一九七二）の後記（一九七〇）において、

（前略）そして、その大部分が、伊藤正之助氏が病に倒れるまでに筆写されたものであり、本書の第一次原稿は、氏の筆に成るものが多いのだから、資料編七～九とおなじく、本書もまた、伊藤氏と私たちの共同の仕事とよぶべきものである。

このことから伊藤が『新編一宮市史』資料編において中心的な役割を果たしていたことがわかる。

さらに伊藤は、『岩倉町史』（一九五五）において編さん委員長を務めたほか、『西春村史』（二九五九）、『春日村史』『師勝町史』（一九六一）の編さんにも尽力した郷土史家の一人であった。

伊藤はまた丹羽郡千秋村（現、一宮市千秋町）と深い關係があり、千秋尋常小学校（現、一宮市立千秋小学校）に勤め、村立千秋青年学校でも教鞭をとっていた。教育者として地域の子どもたちと日常的に接していた経験は、童謡やわらべ唄が生まれ、伝えられてきた生活の場を、身近なものとして捉える視点につながっていたと考えられる。

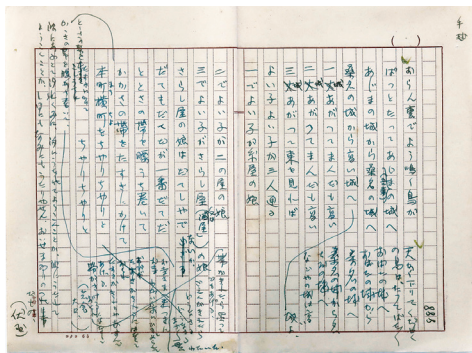
こうした地域社会との関わりを背景に、伊藤は昭和十二年（一九三七）に『尾張童謡集』（日光堂書店）を刊行する。伊藤は同書の中で、柳田國男から折に触れて助言を受けており、そのことも記している。「柳田國男先生の御教を受けたこと度々でした」と述べつつ、「不才の致すところ何一つ先生の御期待に添ひ奉る仕事の出来なかつた」と自らを省みるかたちで記している。この言葉からは、柳田に対する敬意とともに、

伊藤の実直な人柄をうかがうことができる。

伊藤はまた、日本民俗学会の前身である「民間伝承の会」の会員でもあり、雑誌『民間伝承』において、岩倉や千秋を中心とした社会組織、通過儀礼、衣食住、年中行事、信仰、口承文芸など幅広い領域を寄稿し、地域の生活そのものを丁寧に書き留めようとしていた。

参考までに『尾張童謡集』に収録された子守唄の採取地（表1）を整理すると、同じ地域で複数の唄が採集されている例が見られる。一つの土地の中に、さまざまな唄が存在していたことがわかる。今後は、伊藤が記録した唄を、同時期に他地域で採集された童謡やわらべ唄と照らし合わせることで、尾張地域に特徴的な旋律や語彙、遊びの構造がどのように位置づけられるかを考えていくこともできる。

（吉川ひとみ）



直筆原稿（個人蔵）



伊藤正之助『尾張童謡集』（個人蔵）

採取地	現在の地名	採取数
西成	一宮市 西成	18
楽田	犬山市 楽田	11
千秋	一宮市 千秋町	10
扶桑	丹羽郡 扶桑町	10
山口	犬山市	9
大陽	丹羽郡 大陽町	6
丹倉	一宮市 丹陽町	5
羽黒	岩倉市	3
池野	犬山市 羽黒	3
栗栖	犬山市 池野	2
	犬山市 栗栖	2

表1 子守唄の採取地

博物館アルバム

企画展「川合玉堂から
牧進まで 近世・近代
絵画コレクション展」

4月5日(土)～6月8日(日)

一宮市木曾川町出身の日本画家・川合玉堂の新収蔵作品を中心に、2023年に文化功労者に選出された牧進、近世～近代に活躍した月僊、蓑虫山人、伊勢門水、佐分真、伊藤廉、荻須高德、丹羽和子、竹内栖鳳の作品を展示しました。



企画展「モノに残った文字・記号―墨書土器―」

6月14日(土)～8月17日(日)

一宮市内で出土した墨書土器を中心に展示し、市域での本資料の特徴や傾向を紹介しました。市内の資料の特徴として、古代と中世の両方の資料があることを紹介することができました。



展示解説



特別展「岐阜街道」

10月18日(土)～11月24日(月・休)

將軍献上の鮎鮓が運ばれたことで知られる岐阜街道(御鮎街道)の展示を開催しました。岐阜県側からの来館者が多く、展示説明会、講演会も盛況でした。



企画展「いちのみや
アートアニニユアル
2025」

12月6日(土)～12月21日(日)

第83回市美術展市長賞受賞作品を含む74点を展示しました。期間中には、制作の裏側や作品への思いを語る、アーティストトークも開催し、多くの参加者で賑わいました。



アーティストトーク



博物館アルバム

企画展「昭和100年モノ語り」

2026年1月10日(土)～

3月8日(日)



暮らしの中で使われてきた道具や資料を通して昭和という時代を紹介しました。関連催事では展示解説や体験講座を行いました。

令和7年度 愛知県民俗芸能大会 一宮市大会

10月12日(日)



県内に伝承されている民俗芸能を公開することで、その保存・伝承を図り、県民の民俗芸能への理解と認識を深めることを目的に、愛知県との共催で開催しました。
出演・島文楽保存会(一宮市)・新茶屋神明社神楽保存会(名古屋市)・能田徳若万歳保存会(北名古屋市)・常磐車を守る会(常滑市)・山中八幡宮デンデンガッサリ保存会(岡崎市)・高浜えんちよこ獅子保存会(高浜市)

市川房枝シンポジウム

2026年1月25日(日)



女性参政権の実現80年を記念し、その実現に尽力した市川房枝(一宮市名誉市民)のシンポジウムを開催しました。市内だけでなく全国から参加者が集まりました。

尾張平野を語る29

「郷土の資料を読み解く」をテーマに全3回の講座をおこないました。

第1回「江戸絵画〈私的〉発見物語」

4月27日(日) 講師・三重大学

特任教授 山口泰弘さん

第2回「愛知県出土の墨書・刻書

土器を巡って」

7月13日(日) 講師・愛知県埋

蔵文化財調査センター 城ヶ谷和

広さん

第3回「うつろうくらしのモノノミ

語り」昭和日常博物館の昭和生

資料コレクションの構築と活用」

2026年1月18日(日)

講師・北名古屋市歴史民俗資料館

「昭和日常博物館」館長 伊藤明

良さん



博物館アルバム

市民文化財めぐり

11月14日(金)

今年度は「萩原町の文化財を巡る」をテーマに開催しました。14名の参加者とともに、萩原駅から木全乳母車店まで約3kmを文化財保護審議会委員や学芸員の解説を聞きながら歩きました。

【見学コース】萩原緑地のサイカチ→宝光寺→市川房枝生家跡→萩原宿(本陣跡・問屋場跡)→正瑞寺→木全乳母車店(旧村瀬銀行萩原支店)



萩原緑地のサイカチでの解説

民俗芸能公演

2026年3月15日(日)

伝統芸能の保存継承に貢献するため、市内で活動を続け継承されている宮後住吉踊と島文楽(ともに一宮市指定無形文化財)の保存団体による公演を開催しました。



島文楽「三番叟」

木曾川堤の桜を10倍楽しむ講座

2026年

3月20日(金・祝)・・・講座「木曾川堤(サクラ) 観察講座」

3月29日(日)・・・一般向けレクチャー

「サクラの花を見分けよう!」

国指定名勝及び天然記念物「木曾川堤(サクラ)」について、サクラを楽しむながら学んでもらうための講座を開催しました。

催事「第1回推しどきっフレンズ総選挙」

所蔵土器を擬人化したオリジナルキャラクター「どきどきフレンズ」の人気投票となる「第1回推しどきっフレンズ総選挙」を7月19日～8月31日の夏休み期間に実施しました。ウェブ投票と館内での現地投票を併用して実施し、投票総数は852票(現地779票・ウェブ89票)となりました。1位は縄文土器のジョニーで、記念グッズとしてオリジナルブレンドコーヒーと限定缶バッジを作成しました。



総選挙総合順位

古文書講座「古文書にしたしむ」

5月から2月まで原則第2土曜日に計10回開催しました。受講生42名で7グループに分かれ、グループ学習を行いました。北方村の庄屋文書をテキストに江戸時代の村人たちの生活を読み解きました。



博物館アルバム

たいけんの森「わくわく体験」

毎週土曜・日曜・祝休日（夏休み期間中は毎日）に、子ども向けのワークショップを開催しました。今年度は「水引ブローチ」「縄文ころころ」「鶺鴒の工作」「昔の道具をつかってみよう」の4つのプログラムを行いました。



縄文ころころ



鶺鴒の工作



たびぞうクラブと合同
「中野の渡し」に乗船しよう！



資料整理 (考古編)

今年度も実際に博物館の資料整理を体験しました。また尾西歴史民俗資料館のたびぞうクラブと合同で「一宮を知ろう！」という講座を行い、市川房枝さんや大根切干について学び、中野の渡しに乗船しました。

博物館キッズクラブ



文化財防火訓練

文化財防火訓練は、2026年1月28日午前10時から浅井町黒岩にある石刀神社の境内で実施しました。当日は、石刀神社境内の郷蔵から出火し、隣接する山車蔵へ延焼のおそれがあるとの想定で実施し、初期消火の方法などを直接消防士より指導していただきました。3月には開明地区にある円光寺、庚申寺、神明社、大和地区の法圓寺にて文化財パトロールを実施しました。消防本部の職員とともに文化財管理状況や消防設備の点検等を行いました。

文化財防火デー関連行事

萩原中学校より2名を受け入れ、博物館の裏側や日常業務を体験してもらいました。体験を通じて、職業・仕事への関心を高めるように心掛けました。

中学生職場体験



愛知県立大学などから5名の学生が参加し、8月19日から8月23日までの5日間実施しました。一宮市博物館の概要や資料の取り扱いなどを学んだ後、展示ホールの展示を自分たちで企画し、実際に展示まで行いました。

博物館実習

2026 年度催し物のご案内

展覧会

開催中～5月10日（日）

企画展

「文人画コレクション～尾張地域の画人たち～」

5月30日（土）～8月2日（日）

特別展

「みる、さわる、ふれあうーユニバーサル・ミュージアム in 一宮」

10月17日（土）～11月23日（月・祝）

特別展

「人びとの近代史～旧役場文書が語る国と地域～」

12月5日（土）～12月20日（日）

企画展

「いちのみやアートアニュアル 2026」

2027年1月16日（土）～3月7日（日）

企画展

「子どもたちのくらし～まなぶ・あそぶ・そだつ～」

体験・活動

- ◆ たいけんの森 わくわく体験
- ◆ 博物館キッズクラブ（通年講座）
- ◆ 古文書にしたしむ（通年講座）

催事

- ◆ 尾張平野を語る 30
- ◆ 市民文化財めぐり
- ◆ 民俗芸能公演

特別展紹介

「みる、さわる、ふれあうーユニバーサル・ミュージアム in 一宮」

ユニバーサル・ミュージアムとは、年齢や障害の有無などに関わらず「誰もが楽しめる博物館」を指します。本展ではすべての展示資料・作品に「さわる」ことができます。手でさわるだけでなく、全身を使ってさわる作品もあります。みて、さわって、ふれあって、新しい手ごたえを感じてください。



境界 -division-n-2024

一宮市
博物館
だより

第69号

発行日／2026年3月25日
編集・発行／一宮市博物館
印刷／モリプリント株式会社

一宮市博物館

〒491-0922
愛知県一宮市大和町妙興寺 2390
[TEL]0586-46-3215
[URL]<https://www.icm-jp.com>

- X @138citymuseum
- Instagram ichinomiya_city_museum
- Facebook ichinomiya.city.museum
- YouTube @138citymuseum



交通
アクセス

名鉄名古屋本線「妙興寺」駅南口より徒歩7分
ニコニコふれあいバス「博物館西」より徒歩5分
JR東海道本線「尾張一宮」駅下車、タクシーで約10分



※過去の博物館だよりは、当館 Web サイトでご覧いただけます。